

日干レンガ

日乾（にっかん）レンガともいう。今日でも中東地域、とくに農村部などを訪ねれば、日干しレンガ造りの建物をひんぱんに見かける。私も1980

年代から90年代前半にかけての下エジプトや北スーダンの農村でのフィールドワークの際に、そのような家屋をよく目にした。

日干しレンガの製造・利用 私はエジプトやスーダンで、日干しレンガを作っている場面にてくわしたことがある。スーダンでの聞き取りを中心に、そのプロセスを紹介しよう。

まず、少々粘り気がある土と砂とを混ぜ合わせたものに水を加えて練り、粘土状になった素材を木枠に入れて整形する。そして木枠からはずして2～3日ほど天日で乾燥させれば、日干しレンガができあがる。木枠の大きさによってレンガの形を調整することができるが、私が目撃したものは25cm×15cm×8cmほどのものであった。専門の職人が作るが、手馴れた者は1日に2000個ほど作るという。なお、エジプトの日干しレンガはそれよりも少し小さめであるが、素材の中に麦藁くずなどを入れてレンガの亀裂を防ぐ工夫が施されている。

このようにして製造された日干しレンガは、住宅、倉庫、畜舎などの壁を作る建材として利用される。スーダンの場合、日干しレンガを積み上げる際に、レンガ同士の接合剤として砂に水を混ぜたものを用いる。そしてレンガの積み上げが済み、四面の壁が完成すると、外装としてセメントと砂と水を混ぜた素材を壁面に塗り、壁を固めて強化する。一方、内装には砂に水を混ぜたものを壁面に薄く塗り、それからアラビア・ゴムを水で溶かした液体を塗って壁面をなだらかにする。もちろんセメントの利用は今日のやり方であり、かつては泥で塗り固めただけであった。

日干しレンガの分布と焼成レンガ このように日干しレンガはかなり簡単に製造できる建材であるため、古代から建材としてよく利用されてきた。メソポタミア文明などには、日干しレンガ造りの神殿などもあったことが確認されている。その一方で降雨には弱いところから、乾燥地帯で建材としての木材が乏しい地域に



日干しレンガづくり（スーダン）



日干しレンガ造りの家の壁面と水飲み場（スーダン）

活用は限定されてきた。サハラ砂漠に近い北アフリカや西アフリカ、アラビア半島を含む西アジア、ユーラシア中央部の少雨地域などである。また、中南米の乾燥地帯でも利用されてきた。

雨に弱く、全体的に脆い日干しレンガの弱点を補ったものが、焼成レンガである。1980年代初頭の下エジプト農村部などでは、日干しレンガ（「生レンガ」と呼ばれていた、ちなみにスーダンでは「緑レンガ」）から焼成レンガ（「赤レンガ」と呼ばれていた）へと建材がしだいに代わりつつあった。そして、農地の一角で、日干しレンガを4～5mの高さに積み上げ、焼成レンガを作る作業をよく見かけた。

日干しレンガを積み上げながら段ごとに重油を塗り、外壁面にも重油を塗った後に粘土で固めて密閉した塊はアミーナと呼ばれていた。最下段にのみ通気口を開け、内部から火をいれて焼成レンガを作るのである。酸素の供給を制限するので、焼く期間は10～15日ほどかかった。80年代では安価な重油が使われていたが、かつては石炭を使っており、その頃には1か月以上も燃え続けていたという。アミーナからの煙は当時の農村を彩る風物詩のひとつまでであった。

（東京都立大学人文学部社会学科教授 大塚和夫）